

えど友ホームページ
<http://www.edo-tomo.jp/>

江戸東京博物館友の会会報

目次

文豪・夏目漱石展「漱石文庫」中心に貴重な資料を初公開…	1	えど友サークルだより	7
新役員紹介(私のプロフィール)	2~3	ご意見・ご要望にお答えします/会議・会合日誌	7
友の会セミナー『講談を通して江戸の環境問題を考える』	4	えど友プラザ『前線に送る夕べ』	8
特別内覧会『発掘された日本列島2007新発見考古速報展』	5	『川柳と浮世絵と友の会見学会と…』	8
江戸博クリップ『やっぱり猫が好き』	5	『將軍吉宗の諸国刀工御改めと加賀藩の対応』	9
特別観覧会『大鉄道博覧会』	6	江戸博から大川を渡って…⑤【ユニーク問屋街】	10
友の会セミナーに毎回出席された甲田勝義さん	6	催事案内/会員優待のお知らせ	11~12

文豪・夏目漱石展 「漱石文庫」中心に貴重な資料を初公開

来たる9月26日から11月18日まで「文豪・夏目漱石—そのころとまなざし—」展が開催されますが、この特別展を担当された学芸員の橋本由起子さんと金子未佳さんに、その見どころなどを話していただきました。

東北大学、朝日新聞との縁

—江戸東京博物館会館15周年記念のほかに東北大学創立100周年、漱石朝日新聞入社100年といったことがうたわれています。

橋本—戦時中に漱石が残した蔵書や身辺の品々を、戦火で焼失するのを免れるために東京から移した東北大学は、ちょうど大学創立100周年にあたります。当時の同大学図書館長が漱石門下の小宮豊隆だったことが「漱石文庫」として資料などを移す力になりました。「漱石文庫」は通常公開されていませんが、今回はその資料を一堂に展示します。漱石はイギリス留学の2年間に膨大な書物を集めています。その蔵書のほとんどが「漱石文庫」に収められています。内容は文学に限らず美術書、図鑑などのほかロンドンのガイドブックまであり、いろいろなか

とに興味を持っていたことがわかります。中でも美術関係に関心があったようです。漱石が創作を始めたころの初版本も展示しますが、彼の書物は表紙ばかりか書物の中まで非常に美しいことで有名で、美術に関心が深かったことがうかがわれます。

漱石は40歳で朝日新聞に入社していますがそれから100年たちます。入社は小説家として有名になっていく転機のとぎといえるでしょう。入社後亡くなるまでの10年間に多くの名作を新聞に発表し続けたわけです。

—作家活動の10年間は大病を患った10年間でもあったわけですね。金子—神経衰弱とか持病の胃潰瘍で伊豆の修善寺で危篤状態になったり、痔の手術も何回かしています。甘いものが好きだとか落花生が好きだとか食べ物にたいする執着は強かったようです。千円札のいかめしい顔でなく食いしん坊なところ、また家族思いなところも展示の中で表したいと思います。

漱石を通して明治時代を追う

—見どころをまとめますと？

橋本—これまで各地で開かれた漱石関



係の展示会に比べ規模とその切り口に特徴があります。全体を6章に分け、1章「生い立ち・学生時代」、2章「松山・熊本時代～ロンドン留学」、3章「帰国・創作開始」、4章「漱石が描いた明治東京」、5章「漱石山房の日々」、6章「晩年」の構成になっています。実は会場入り口が序章ということで、骨格などを調査して作った「漱石人形」と、漱石の声を聞いてもらい、漱石のイメージを持って展示室に進んでもらうことにしています。漱石の生涯を追うことが明治の時代を追うことだということが展示を通して実感いただければと思っています。

◆夏目漱石関連の「友の会セミナー」、「友の会特別観覧会」が開催されます。詳しくは11ページの「催事案内」をご覧ください。

新役員紹介

(私のプロフィール)

5月25日開催の第7回友の会定期総会で選出された新役員12名の自己紹介です。
よろしくご支援をお願いいたします。

*イラストは会員でこの度役員になった藤井文乃さんに描いていただきました。

会長 ^{たまき たつじ} 玉木達二

6年前、第二の人生に楽しみを求めて江戸博に来ました。人のうしろからガイドさんの説明に聞き入りました。最終点に来て、「よろしければどうぞ」と受け取ったのが友の会入会案内でした。ついでにガイドにも応募し、以来夢中で過ごしてきました。ちなみに火付け役のガイドさんは、山本初代会長、会も発足したばかり、人集めに苦勞しておられたんですね。



副会長(総務部会長) ^{ごとう さちこ} 後藤幸子

友の会に所属して5年ほどになります。その少し前に横浜より転居した先は本郷でした。無縁だった時代劇の世界が足元から迫ってきたのです。古地図をめくる楽しさを知り、やがて江戸博を視野にとらえたのです。“玩具箱”いや“宝箱”の中に身を置くうちに、次第に友の会の活動に関わるようになりました。この度再度役員を拝命致しました。旅好きな私には「古地図を巡る旅」続編のように思えます。どうぞよろしくお願い申し上げます。



副会長(事業部会長) ^{ふじむら たけお} 藤村武雄

この度は副会長ならびに事業部会長の重責を担うことになり、身のひきしまる思いでいっぱいです。生まれは八丁堀で、日本橋、八丁堀、銀座で19代を数える正真正銘の江戸っ子とっております。半世紀近く江戸の歴史、文化について研究を続けており、せんえつながら知識・経験には自信を持っております。友の会の運営につきましても、楽しく有意義な会として活動できますよう、精一杯力をつくしてまいりたいと思います。



会計 ^{はやし よしゆき} 林 義之

5年前に江戸博を最後に東京都を定年退職しました。在職中は館の広報普及事業とともに展示解説ボランティアの運営に携わり、ほどなく「友の会」が創設されました。今、皆様のご努力で大「友の会」に成長した姿を見て感無量です。楽しい「友の会」となるよう微力ですががんばります。まだ仕事に就いていますのでご迷惑をかけるかも知れませんがよろしくお願い申し上げます。



副会長(広報部会長) ^{おおいし けんいち} 大石憲一

昨年、退職するまでの間、私の仕事上のホームグラウンドは浅草橋・蔵前から浅草にかけてと、隅田川(大川)を挟んだ本所などで、台東区と墨田区の川沿いが中心でした。この辺りは時代小説にも馴染みの深い地名が多く、仕事で近くまで出掛けるにも何か楽しいものがありました。自然に江戸に親しんでいたのかもしれませんが、『えど友』を通して皆さんと一緒にさらに江戸を楽しめたらと思います。



会計 ^{おかとう かずこ} 岡東和子

私は歌が好きで「国技館5000人の第九コンサート」で歌い始めて5年目になります。また木彫り彫刻にも興味があり、現在『立ち雛』を彫っています。このたび新入り役員を仰せつかりました。「楽しくてためになる」友の会活動を継続できますよう微力ながらお手伝いさせていただきます。ひとりでも多くの方々に会の活動に参加していただき、一層充実した会にしていけたらと念じております。



事務局長

しみずまさひろ
清水昌紘



特典があるというそれだけの理由で入会した04年。何かお手伝いできればと事業部に所属して3年。受付では「ご苦労様」と声をかけられ、見学会では旗持ちを買ってでくれたり、散乱した資料を拾ってくれたり、「大変だね」と励ましてくれたり、まずい説明にもかかわらずお礼状を頂いたり、と心優しい会員がいっぱい。感謝の気持ちを込めて務めさせていただきます。

運営委員

ふじいあやの
藤井文乃



いつも総務部会で、友の会の皆さんへの発送作業をしています。メンバーとおしゃべりしながらこつこつ作業、楽しいですよ。さらに今期は役員ということで、皆さんと一緒に、より楽しいうれしい濃い会にしていきたいです。よろしくお願いします。

運営委員

しもながひろみち
下永博道



運営委員の下永です。2年ほど前より事業部に参加させていただき、古文書や見学会の受付などを通じて皆様とともに友の会の活動を楽しんでおります。江戸博のカバーする領域は広いのですが、自分が興味を持つものと会員の希望は近くにあるはずで、江戸のあちらこちらを訪ねていこうと思っています。機会がありましたらお話しください。

監事

はたけなか いさむ
中 勇



先日3度目のトルコ旅行に行ってきました。東西文化の交流点であるかの地はギリシャ、ローマ、キリスト、イスラムの各文化が混在し、歴史的にも、民族的にもとても興味が尽きない国です。江戸は、日本の交流地点であり、それが江戸文化をはぐくんだのでしょうか。おいしいトルコ料理を食べながら、江戸博のことを思いました。引き続きよろしくお願いします。

運営委員

おかはしそのこ
岡橋園子



最近つくづく言葉の難しさを感じています。ちょっとした言葉で人を喜ばせることもできる一方傷つけることもあるからです。大臣が不用意に発する言葉が国民の怒りを買いました。人が書いた原稿ばかり読んでいるせいか自分の言葉が分からなくなっているのでしょうか。人が楽しくなる言葉をつづった文章を書きたいと努力しております。

監事

いなみよしこ
井波良子



監事をもう一期担当することになりました。友の会会員が増えたことはうれしい限りです。そして、それ以上にうれしいのは、友の会の活動が充実していることです。会員のパワーのすごさを感じます。私は、江戸博に6年弱、職員として在籍していました。今は、友の会会員として、皆さんと交流できるのが楽しみです

会員資格継続 手続きの お願い

会員資格の有効期限は、入会の日から1年間となっています。間もなく有効期限を迎える方には「継続手続きのお願い」を郵送いたしますので、継続ご希望の場合は同封の払込用紙にて年会費の納入をお願いいたします。友の会は会員の皆さまによって支えられていますので、1人でも多くの方の継続をお待ちしています。

■継続手続きをされませんと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなりますので、ご注意ください。

訂正:前38号2ページ「江戸博クリップ」中、もち玉ネギはもちとうもろこしの誤りでしたので訂正いたします。

「講談を通して江戸の環境問題を考える」

— 講談「もったいない善兵衛」—

講師 神田 紫さん (日本講談協会副会長)



講談の世界

私は演芸界に所属し、普段は毎日のように寄席に出演しています。最近落語の世界を描いたドラマのヒットで寄席のお客様が増えてきています。私が二代目神田山陽の門をたたいたのは28年前。ずっと自分のことで精いっぱいでしたが、あるときノーベル平和賞受賞者でケニアの元環境副大臣・ワンガリ・マータイさんにお目にかかったことで私の人生がガラッと変わりました。これはのちにお話します。

講談の世界は、前座見習い、前座、二ツ目、真打とあって落語界と同じです。関東では神田、一龍齋、宝井、田辺、小金井、桃川の6門があり、総勢50数名、半数は女性です。関西に旭堂という1門があり、全部合せて60名位が講談師の総数で、貴重な存在です。

講談の歴史は江戸時代からといわれますが、もっと前の戦国時代の「物見の侍」のご注進から始まったともいわれます。また瓦版読みから始まったという説もあります。いずれにしても何百年の歴史があるわけです。

環境問題と3R運動

さて、今日も大変暑いですが、このところ雨は少ないです。いま各地で水不足、大干ばつなど異常気象が起きています。地球温暖化の影響でしょうか。温室効果ガスの80%はCO₂とメタンですが、地球全体がビニールハウスの中に入っていると考えると分かりやすいと思います。この中が適温ならいいのですが、どんどん温度が上がると作物は枯れ、人間の健康を害してしまいます。

温暖化の原因であるCO₂を吸ってくれるのは広い海と土、それともう一つ、木の葉です。いま植樹、植林を奨

励しているのはCO₂を吸収するためなのです。

いまCO₂を削減するためにいろいろの動きがありますが、私たちが身近でできることといえば3R運動です。

3つのRとはReduce(ゴミの削減)、Reuse(再利用)、Recycle(再資源化)です。これを提唱しているのがさきほどお話したワンガリ・マータイさんなのです。

“もったいない”という日本語

このマータイさんが京都議定書の行事で来日されたとき、あるインタビューで「世界中で3Rキャンペーンをやっていますが、日本語では何と言ったらいいのでしょうか」と聞かれました。そのときの答えが「それは“もったいない”ではないでしょうか」でした。“もったいない”という日本語の中に3Rがすべて含まれていると知ったマータイさんはこれに感銘を受け、これを世界共通語にしようと講演などで話をされたあと、最後に会場にいる皆さんと「MOTTAINAI」を三唱しているそうです。

Rにはもう1つ Respect (尊敬する)が入っていて、実はこれも日本語の“もったいない”という言葉の意味の中に含まれているのです。私はマータイさんに“もったいない”の意味の重さ、深さを改めて教えられました。そこで“もったいない”をテーマに講談をつくりあげたのです。

私自身も「マイ箸運動」「マイバッグ運動」などできることは何でもやっています。「チリも積もれば山となる」でやがて大きな効果が出るはずで、みなさんもぜひ「もったいない運動」に取り組んでください。

【記録】文・写真：広報部会・松原良

『もったいない善兵衛』あらすじ

時は、江戸時代。新宿という宿場町に「吉屋」という小間物屋がありました。

ある日、この店に善兵衛という小僧が奉公に参りますが、この善兵衛、なかなか利口者で働き者です。貧しい農家に生まれ育ったためでしょうか、どんな物でも大切に扱います。まわりで物を粗末にしている場面を見ると、「もったいない、もったいない」と言いながら、無駄を省く努力をいたします。

お客様に頼まれた品物を届けに行くとき、品物を丁寧に包んである薄い紙がゴミとして捨てられようとしていますが、善兵衛はそれをもらって帰り、こよりにして帳面をとじたり、主人の煙管の掃除に使ったり、いろんな形に切ったり、自分たち奉公人の部屋の障子やふすまの穴の修理にも使います。また「毎日ふき掃除に使う井戸の水がもったいない」と言っているのは、空になった酒樽や桶を蔵から引っ張り出し、それに雨水を貯めておいて掃除に使う工夫を致します。

ある時、お客様が「古くなった物を、新しい品物に買い換えたい」と言いますが、「修理すればまだまだ使えます」と言って、お客様から益々信頼を得ます。

こんな心がけですから、久左衛門夫婦からは重宝され、周囲の人たちからは、いつしか「もったいない善兵衛さん」と、呼ばれるようになりました。その後も商いに精を出し、番頭となって店を任せられ、ついには「吉屋」を関東一の大店へと成長させたのでございます。

【注】講談「もったいない善兵衛」のあらすじは、神田紫講師にまとめていただいたものです。

「発掘された日本列島 2007 新発見考古速報展」



6月5日から7月15日まで開催された「発掘された日本列島 2007 新発見考古速報展」の特別内覧会は6月4日の午後に実施されました。

この展覧会は全国7カ所に持ち回られるものですが、東京では今や江戸東京博物館の年中行事となりました。実行委員長藤本強氏はあいさつの中で、これが第13回目です。昨年は合計15万人

の見学者があり、通算では百万人を超えたこと、考古学にはこれを支える多数の固定ファンがあることについて謝辞を述べました。また今年の展示は決して派手ではないが、これまでの見解を変えなければならないような発見もあり、そして「発掘されたアクセサリ」の特集があつて、展示方法も円熟して来たと言費の言葉がありました。

旧石器遺跡では、笠間市の小俣遺跡の水晶製尖頭器が展示されました。房総半島では和田峠から黒曜石を運んで矢尻など尖頭器を作っているのに、笠間あたりで多分近辺から採集したものか、水晶を利用しているのは驚くべきことかも知れません。ガラス質の黒曜石に対し、水晶は固い結晶で自由に加工するのはむずかしく、むしろ研磨によって装飾にしたいくなるものではないでしょうか。

一方、東京の高井戸東遺跡で出土した炭化材から旧石器時代の気温が今より5度低かったと推定されるなど、旧石器時代研究は再び歩きはじめたようです。

縄文遺跡の^{めおといし}垂崎市女夫石遺跡は巨石を中心とした^{さいし}祭祀遺跡で、興味深い表情の土偶がいろいろ出土しています。

青森の近野遺跡からは小さな石に線刻で3体の人物を描いた「石冠」が出土しました。線刻の内外が、長い間土中にあつたために鉄分で赤くなつており、「このことから最近線刻されたものではないことがわかる」と説明されていました。最近ねつぞうされたもの、と疑われた出土品なのでしょうかね。

千葉市の人形塚古墳からは、つば広で高くつがった帽子を被りあごひげを蓄えた、武人の埴輪が多数出土し、それが30km程離れた外房の方で製作して人形塚に運ばれて来たと言理解されています。高さ120cm余の埴輪の完成品を運んだとは思ふべきですね。

出土品は旧石器から江戸時代まで、広範です。特集「発掘されたアクセサリ」を見ると縄文時代は主として骨・牙・角が材料ですが、弥生時代になるとヒスイのまが玉やガラスの加工品、貴金属や南海産の貝などが使われています。平城・平安、その後は一気に飛んで、小田原宿の^{かんざし}旅籠屋跡から出土した女郎の簪なども陳列されました。発掘は常に進みます。来年も楽しみです。

写真：人形塚古墳出土の「あごひげを蓄えた武人埴輪」

【取材】文・写真：広報部会・佐藤幸彦



江戸博クリップ

やっぱり猫が好き

我が家に三毛猫がいました。前脚が片方ない女の子でしたが、そんなハンディはものともせず、ケンカを仕掛けに走ったり、塀の上で昼寝したり。人懐こい性格で近所の人にも愛されていたので、彼女が死んだときには、両隣の方や前の飼い主さんも弔問に訪れました。もともと神奈川県逗子市内の駐車場^{おぼんず}で血だらけになって倒れているところを拾われ、一命を取り留めた強運な猫です。

逗子市に隣接する横浜市金沢区にある称名寺。鎌倉時代に創建されたそのお寺には金沢猫の伝説が残されていま

す。称名寺の教典は金沢の領主北条実時が中国から取り寄せたもので、その書物^{そがい}を運んだ船に唐猫が飼われていました。それは大事な教典を鼠害から守るため。金沢に着いたので金沢猫、「かな」と呼ばれ、大切に扱われました。教典を守った金沢猫は、称名寺所蔵の^{おぼんず}涅槃図の中に描かれています。通常、涅槃図に猫は描かれませんが、なぜなら^{しやか}釈迦が入滅したとき、万物の生物が嘆き悲しんだのに猫は寝ていたから。ありそうな話で笑ってしまいます。金沢猫は代々子孫を増やして、室町時代には猫塚が建てられました。現在も東

学芸員 西村 直子

朝比奈町の千光寺に残っています。この「かな」ちゃん、短尾の三毛猫だったとか。うちの「みーちゃん」も短尾だった…そう、もしかして！ みーちゃんは金沢猫の末裔？！ そうですね、文章を書いていると傍らでジーツと文字を眺めていたり、新聞を広げて読んでいると上に乗ってきたりして…きつと書物を守ったご先祖の血を引いていたのに違いありません（親ばかです）。彼女が去って3年近く経ちますが、やっぱり猫が好きです。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

特別展 大鉄道博覧会 ～昭和への旅は鉄道に乗って～



江戸博では7月10日から9月9日まで開催中の特別展「大鉄道博覧会」の友の会特別観覧会が7月13日に開催されました。明治の文明開化以来、新橋―横浜間を皮切りに全国津々浦々まで延びていった鉄道、荘厳な響きと共に時代の先端を走りぬいた蒸気機関車、昭和30年代(1955～1964)をピークに電車に移り、世界最先端のスピードと安全性を誇る新幹線として新しい輸送機関の役を担っています。これらを一堂に集め展示するというこの特別展、明治から戦後までと題して鉄道の歩みから始まり、旅と鉄道・暮らしの鉄道など八つの部門に分けて展示されています。

まずは大画面の白黒映画でもうもう

とした煙と共に汽笛を鳴らしながら冬の山間を走る蒸気機関車、巨大な生き物のように走りぬける雄姿は鉄道マニアに限らず見るものを感動させる。そして初代の蒸気機関車・弁慶号を展示、機関車としては小粒だが軌道に載せられた実物はすばらしい。横壁には初めて新橋・横浜間を走ったときの三等乗車券をはじめ、初代の懐かしい品々を展示、マニアならずとも垂涎の的となるものばかりです。

明治13年(1880)初めて鉄道が敷かれてから約40年、大正9年(1920)には全国北は北海道の稚内から九州鹿児島まで全国に鉄道網が敷かれ、戦中戦後の鉄道の輝かしい発展を示しています。そして戦後の混乱する中で鉄道

はその輸送という使命を堅固に死守、闇市の荷物や担ぎ屋の荷物を運びました。35kgの実物展示はとてつもなく背負ってみようとは思えない重さです。

そして昭和35年(1960)、旅はあこがれの時代へと移り東京・大阪間が全線電化され、特急つばめやほと号が6時間で走り、やがて新幹線の新時代を迎えます。最後は「線路は続く・鉄道の再発見」として、鉄道は安全・高速・大量輸送ばかりでなく、優れたエネルギー効率を持っており有害物質の排出量がほとんどゼロです。「地球に優しい」輸送機関・乗り物であり、地球温暖化防止に向けて大きく寄与するとして結んでいます。

【取材】文・写真：広報部会・林 榮二

「友の会セミナー」に 毎回出席された甲田勝義さん



友の会では昨年度に「友の会セミナー」を計14回開催しました。出席状況を調べたところ、毎回出席されたのは担当の事業部会の2名を除けば甲田勝義さんお一人ということがわかりました。14回すべてに出席されるということは大変なことなので、甲田さんにいろいろとお話を伺いました。

—14回すべてに出席された現在のお気持ちは？

「とてもうれしく充実感を感じています。この度、友の会から連絡をいただき、改めて全回出席できたんだと実感しました。今年度もできる限り出席したいと思っています。」

—最初からすべてに出席されるお考えでしたか？

「毎年、『友の会総会通知』の事業計画

と会報『えど友』を読んで、すべてに出席できればと考え年間のスケジュール表に組み込んでいます。18年度は日程等が幸い重ならず思い通りになりました。」

—特に印象に残った講演は？

「『古文書が語る白木屋の商いと暮らし』です。古文書の解説を聞きながら当時の白木屋の奉公人生活全般、心構え、商売を垣間見ることができ有意義でした。また、油井宏子講師の歯切れの良い、わかりやすい講演が印象に残ります。」

—『えど友』にセミナーの要録を掲載しています。お読みになっていますか？

「毎回読ませていただいています。自分自身その都度『聴講録』を作成して

いますが、多少不明な点があっても、解決でき大変参考になっています。また、わかりやすく簡潔にまとめてあり、楽しみにしています。」

—友の会に加入された動機はなんですか？

「元来歴史が好きで、定年後のライフワークの一つにと考えていました。」

—セミナーや友の会の運営にご希望がありますか？

「近年会員数も増加し、セミナーも盛況でうれしく思っております。益々のご発展をお祈りしています。」

甲田さん、お忙しいところをありがとうございました。引き続き友の会活動をお楽しみください。

(ご参考)

14回 参加者3名	12回 参加者 3名
10回 参加者3名	9回 参加者 5名
8回 参加者5名	7回 参加者 11名
6回 参加者10名	5回 参加者 21名
4回 参加者23名	3回 参加者 36名
2回 参加者48名	1回 参加者 135名
計303名	

【構成】広報部会・菅沼和男

◎活動概況

- ◆落語・講談を楽しむ会：6月19日(火) 早稲田～高田馬場周辺の落語・講談の舞台となった場所を散策、八幡船で昼食後講釈師の一龍齋貞寿さんによる「安兵衛掛け付けから仇討ち」の一席を鑑賞。参加者14名。7月17日(火) 江戸博会議室で前回散策関連の歌舞伎通し狂言「怪談乳房榎」のビデオ、9月に向け落語「大山詣り」のCDを鑑賞。参加者7名。
- ◆藩史研究会：6月28日(木)「下野宇都宮藩」について大渡真司さんが研究発表。参加者19名。7月26日(木)「甲斐甲府藩」について山口義正さんが研究発表。参加者21名。
- ◆古文書で『八丈実記』を読む会：6月14日(木)、6月29日(金)、7月12日(木)、7月27日(金)に例会を開催。参加者は各7名、6名、5名、7名。
- ◆江戸御府内八十八カ所をめぐる会：第1回として6月28日(木)と7月1日(日)に「第1番高野山東京別院」(港区高輪)など3カ所をめぐる。参加者は各9名、20名。また、第2回として7月26日(木)と7月29日(日)に「第72番不動院」(台東区寿)など9カ所をめぐる。参加者は各19名、11名。

- 各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また新しいサークルの立ち上げ希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。申込・問合せ先 〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 江戸東京博物館友の会事務局 Tel.03-3626-9910



◆◇ご意見・ご要望にお答えします◇◆

問 平日に見学会を実施することはできないでしょうか。

答 友の会も現在会員数が1,300名以上となり、セミナー、見学会など各行事とも、100名を越える参加者になっております。見学会開催時の歩行道路の交通事情、ガイド人数不足などから平日実施は、困難と考えます。

実施方法の検討は、続けていく所存ですので今後ともご協力をお願いします。

◆役員会

6月14日(木)18時から開催。会員数の算出方法には複数の方法があるため、統一基準を作ることになった。セミナーで講師が映像を使用するケースが増えたので、記録を映像で補充する必要があるのではないかとの意見があった。今後、費用などの調査が必要との意見があった。出席者12名。

7月11日(水)17時から開催。会員からの平日史跡ツアーの要望があり、「えど友」39号で回答する。会員数把握について、チームで検討された。会費の支払いが当月内より遅れた場合に生じる人数違いの問題は解消していくことにした。出席者10名。

◆三部会合同会議

7月25日(水)16時から開催。事業

会議・会合日誌

2007/6～2007/7

部会・広報部会・総務部会が江戸博7F「隅田川」に集合。自己紹介後、それぞれの部会の情報交換を行った。出席者26名。

◆事業部会

6月7日(木)17時から開催。実施事業について報告。見学会は参加者増が見込まれるため、スムーズに実施できるよう配慮する。出席者15名。

7月5日(木)17時から開催。各セミナーの参加者数を報告。9～11月実施の古文書講座は講師の都合により日程の変更があり、『えど友』39号で広報し、受講者へはがきで連絡する。出席者17名。

◆広報部会

6月22日(金)13時から開催。取材

原稿のボリューム、度量衡等の表記について確認した。出席者9名。

7月20日(金)13時から開催。会員数のホームページ掲載は毎年1回、3月末時点の会員数のみとした。「えど友プラザ」に「江戸小説やその作家について」をテーマとする原稿を募集することとした。出席者12名。

◆総務部会

6月27日(水)13時から開催。会員数の把握方法については、実情調査の上統一基準を作ることとした。「江戸博NEWS58号」、「えど友38号」などの発送業務を実施。出席者9名。

7月6日(金)13時から開催。三部会合同会議(7月25日開催)の参加者名簿作成などの準備を行なった。出席者10名。

前線に送る夕べ

菅沼和男

旅先の宿で手にした雑誌の「テーマ音楽」というコラムに「ハイケンスのセレナーデ」という一曲がいくつかの曲とともに紹介されていた。この曲はご存知の方もあると思うが、戦時中に放送されていた「前線に送る夕べ」というラジオ番組の冒頭に流されていたものである。

「前線に送る夕べ」という番組のあったことは確か何かで読んだことがあるが、放送当時、まだ就学前だった私はむろん曲も番組内容も知らない。

そこで、この番組はどのような内容を電波に乗せて外地の兵士に送っていたのか、交戦国の音楽は禁止されていたのではなかったのかというおぼろげな知識を多少なりとも確かなものにしたくなった。

「前線に送る夕べ」はそれまでの「前線・銃後を結ぶ」という声の便りの交換放送を発展させたもので、第1回目の放送は昭和18年(1943)1月7日である。前年の6月にはミッドウェー海戦で大敗北を喫し、アメリカ軍の本格的な反攻が開始され、戦況が怪しくなりつつあった時期である。初回の番組内容は「日比谷公会堂に出征軍人の家族を招待して行われ、在満部隊

希望の管弦楽を日響、ジャワ部隊希望の落語を金馬、さらに高峰三枝子、市丸、轟夕起子が歌謡曲を演じ、北や南の前線に送られた。(中略)その後終戦の直前まで、毎月9日と24日の2回、定期的に放送された。放送内容は単に大衆芸能を並べるだけでなく、バラエティー「声の慰問袋」、劇場あるいは寄席中継など、(中略)決戦下の新春風景(昭和20年1月)のようなものも放送されている」とあった。(『日本放送史』)

また、「兵士への激励のことば、内地の事情、軍歌なども放送されていた」(『放送50年史』)とあるが、時局の益々の緊迫とともに娯楽色は徐々に薄れ、戦時色が一層強まった内容になっていったものと想像される。

戦争下の国内放送の基本方策については、情報局から昭和17(1942)年2月に示され、その一つに「放送内容より米英的、小市民的色彩を払拭する」ことがうたわれている。

ただ、米英的な曲の掃蕩は建前論であったようだ。おなじみの「庭の千草」(The Last Rose of Summer)や「植生の宿」(Home, Sweet Home)は、前者はアイルランド民謡、後者はイングランド民謡ではあるが、長い間に日本的に消化され、国民生活の中にとけこんでおり、日本語で歌われる限り学校でも教えられ、放送でも許可されていたからである。

冒頭に紹介した作曲家ハイケンス・ジョニー(1884 - 1945)は「オランダ生まれで、ケルンで作曲を学び、主としてドイツで活動したという。第二次世界大戦末期に帰国したが、その経歴から親独派とされ、戦争終結時に連合国に捕らえられ獄中で自殺した」(『新訂・標準音楽辞典』)とある。

ハイケンスは米英の作曲家ではなく、ましてや親独派とみられていたという経歴からそのセレナーデが戦時下の番組のテーマ曲に採用されていてもおかしくはなかったであろう。曲そ

のものは比較的単純な旋律で親しみの持てるものである。

それにしても、遠く祖国を離れ、愛する家族との文通もままならない前線の兵士達に、この番組はどのように受け止められていたのであろうか。

川柳と浮世絵と 友の会見学会と...

松原 良

まだ寒いころでしたが、たばこと塩の博物館で「川柳と浮世絵で楽しむ江戸散歩」という企画展がありました。江戸博も協力しているものです。川柳、浮世絵、江戸散歩のどれにも興味津々の私は会場をのぞいてみました。

川柳が全部で187句出ていて、それらに関連する浮世絵が展示されていたのですが、それを見ているうちに友の会の見学会で行ったところがあることに気がつきました。以下、見学会ごとにどんな川柳とどんな浮世絵があったのか、簡単にご紹介したいと思います。もっとも浮世絵の方はタイトルのみです。川柳にはちよっぴり注をつけます。さらに見学会の年月日、タイトルとその様子が報告されている『えど友』の号数・報告者名も付記しました。もう一度読み返して見学会をしのび、川柳を味わってください。

●「おっ立つように愛宕の男坂」

(葛飾北斎画『東都勝景一覽』より「愛宕山」)平成15年6月21日「鉄道唱歌見て歩き」(『えど友』15号・松原良報告)。これは説明不要でしょう。

●「紅葉よりめしにしよう和海晏寺」

(初代・歌川広重画『江戸名所品川海晏寺紅葉見』)平成17年6月11日「江戸四宿を歩く品川宿その2」(『えど友』27号・玉木達二さん報告)。ここの「めし」は食事のことではなく、品川の「飯盛女」のことです。どうやらこちらが本命の紅葉見物のようです。

●「いい日和梅から亀へおし廻し」



▲昭和18年1月7日付けの朝日新聞のラジオ欄



▲(初代)歌川広重画『名所江戸百景 亀戸梅屋敷』
(初代・歌川広重画『名所江戸百景 亀戸梅屋敷』)平成17年10月22日「大相撲の史跡探訪その3」(『えど友』29号・松原良報告)。梅は梅屋敷、亀は亀戸天神で、梅屋敷に梅見に行き、あわせて亀戸天神にも詣でたというもの。

●「板橋と聞いてむかひは二人減り」
(歌川国芳画『木曾街道六十九次之内板橋』)平成18年3月25日「江戸四宿を歩く板橋宿」(『えど友』31号・藤井文乃さん報告)。「むかひ」は旅から帰る友人などを街道筋の宿場まで迎えに行く「旅迎え」のこと。もっともこれもついでに宿場女郎を買って遊ぶのが半分は目的で、板橋じゃやめとこうという者が2人出たという意味で、板橋のその道での魅力は品川などより落ちたらしいのです。

●「山王と神田でも見た金屏風」
(葛飾北斎画『東都勝景一覽』より「神田明神」)平成18年9月30日「神田・お茶の水を歩く」(『えど友』34号・大石憲一さん報告)。山王権現も神田明神も祭礼時道筋の商家などは店頭で金屏風を飾ったといいますが、当時「金屏風」は高価で多くは借り物だったらしいのです。

●「伽羅よりも勝る千住の檜の杭」
(初代・歌川広重画『名所江戸百景 千住の大はし』)平成18年11月26日「江戸四宿を歩く千住宿その

2」(『えど友』36号・秋元英夫さん報告)。檜は高野檜、伽羅は貴重な香木。隅田川に最初に架けられた千住大橋はその資材に高野檜が使われ、伽羅よりも優れているとされたのです。

●「新宿の子供は早く背が伸び」
(初代・歌川広重画『名所江戸百景 四ツ谷内藤新宿』)平成19年5月12日「江戸四宿を歩く内藤新宿その2」(『えど友』38号・深尾恵美子さん報告)。実はこの企画展を見たときにはまだこの見学会は行われていなかったのですが、付録の一つ。この絵は画面に大きく馬の脚を描き、人馬が盛んに行き来する様子を表しています。当時、馬糞を踏むと背が伸びるといふ俗説があったそうです。

将軍吉宗の諸国刀工御改めと加賀藩の対応

佐藤幸彦

享保4年(1719)11月、幕府から諸藩に領内の刀鍛冶の名とその筋目(鍛冶としての系統)を報告するよう、指示が出されました。次いで翌年3月に、報告した自領の鍛冶のうち上手だと思ふ工の作を一振り提出するよう、と指示が追加されました。決して新たに制作する必要はない。有り合わせのもので良い。刀がなければ脇差でもよろしい、というのです。指示を受けた各藩は迷いました。多くの刀工を抱えていたら、泰平の時代に武器を蓄えていると、にらまれるのではないか。良い刀工がいなかったら、治にいて乱を忘れているとしかられはしないか。将軍が上覧になるのに、本当に有り合わせや、短い脇差しか出さなくて良いのだろうか。他藩はどうするだろう、といろいろ悩んだのです。

加賀藩は金工・陶芸(九谷)・漆器(輪島)など、職人の養成には熱心でした。刀工についても定期的に領内の刀工の状況を調べていたので、直ちに16名

の刀工を書き上げて報告しました。中には「近年病身に罷り成り打物仕り難く候」という付記もあります。

家老たちの評議の結果、加賀藩のエース兼若と陀羅尼勝国の作を、提出することになりました。兼若は代々名工として全国に有名で、加賀藩では「娘やるなら兼若を指す若者に」と言われたものだそうです。一方、陀羅尼勝国はいわゆる「関の孫六三本杉」の伝統を受け継いだ有名工でした。そして兼若の作品の中では家老今枝直方のもの、勝国は家老奥村内記のものを提出用に選定しました。加賀藩は家老でも一万石以上で、大名並です。

加賀藩では、幕府の刀剣目利所本阿弥家の十郎右衛門に扶持を与えて刀剣鑑定コンサルタントにしていました。その十郎右衛門から飛脚が来て、その手紙によると、本日上様から本阿弥家の人々が召され、10本の刀の作者銘を隠して意見を求められたが、その時の感触では、上様は、巾もあれば厚みもある頑丈な造込の作で、刃文は派手に大きく乱れた豪快な作がお好きなようだ、というのです。しまった！今枝達は、鎌倉時代の古作のように姿が優美で刃文もおとなしい、「古の名刀」のような作品を選定したのでした。全然価値観が違ったのです。勝国は選に入っていたがエース兼若は落選でした。加賀藩は更に、それなら何としても丈夫な作を、ということで前田近江守(家老)所持のものと絹川源左衛門所持のものを追加提出しました。十郎右衛門からは、兼若には今枝直方が扶持を与えているので、勝国か兼若かということになれば、今枝の顔をつぶさないように、兼若の方を推薦するように談合していますという密書が届きました。結局1位は全員一致で筑前黒田藩の信国重包が獲得したのですが、これには本阿弥の本家、光通がコンサルタントにいたようでした。しかし兼若・勝国は両工とも、ベストテンには入ったのでした。

【ユニーク問屋街】



かつて橋道具街を望む

これまで大川を渡って、川沿いを浅草橋辺りから言問橋、桜橋へと歩いてみましたが、今回は大川から少し離れた地域を含めた現在のユニークな問屋街を紹介したいと思います。台東区は東京23区の中で最も面積の小さな区だそうですが、その中にさまざまな産業がそれぞれに集まり独特な問屋街風景を見せています。江戸のころから御蔵前によって周辺の商業が発展してきたという下地があり、浅草の観音さまに参詣する人々を相手にしたお土産屋などが誕生したりと、台東区には商業発展の基盤があったのかもしれない。

玩具産業の最盛期は昭和30年代

蔵前界隈を中心に急速な発展を見せた産業の一つに玩具業界があります。とくに昭和30年代(1955~1964)はアメリカへの金属玩具(ブリキのおもちゃ)の輸出で大繁盛し、国の重要産業の上位に数え上げられたほどです。玩具の問屋は浅草橋から蔵前、駒形にかけての江戸通り沿いに数多く見られましたが、残念ながら現在は流通と生産地の大きな変化で、通りを見渡しても玩具問屋街というイメージで街並み



▲食品サンプル専門店のウインド

をとらえることができません。東京玩具人形問屋協同組合の組合員数はひとところ200を超えていたものの現在は100社強とのことです。

「食」を支える道具の街・合羽橋

浅草の問屋街でユニークで楽しい問屋街といえば、プロを対象にした厨房器具、店舗関係のさまざまな商品がそろった合羽橋道具街をおいてほかにないでしょう。合羽橋道具街の浅草通りからの入り口にある店舗の屋上には大きなシェフの像が目を引き、それだけでもなんだかワクワクする雰囲気が漂ってきます。道具街は最近ではマスコミ関係にも度々紹介され、中でも「食品サンプル」の店舗などは外国のお客さんにも人気があるとか。食堂・レストランのウインドに飾られている料理の数々は見事なもので、サンプル屋さんに本物の食堂と間違えて入ってくるお客さんもいるという話があるくらいです。近頃では食品サンプルのミニチュアが作られキーホルダーなどとしてお土産用に販売されています。あなたの携帯電話にエビフライなど下げてみてはいかがでしょうか！

東京合羽橋商店街振興組合のホームページによれば、店舗総数は170店舗、このうち厨房器具や食器などの専門道具を扱う店舗は156店舗ということです。商店街の97%が組合員だとのことで、大正10年(1921)に現組合の基となった「合羽橋合盛会」が誕生しています。この数多くの店舗は和洋中華食器、陶器・漆器など11の業種に分類されるそうです。街の中央辺りに道具街誕生90年を記念して「かっぱ河太郎」の碑が平成15年に建てられています。黄金の「河太郎」は一見の価値あり!!

宗教用具や靴の問屋街も

東京メトロの上野~浅草間がアジア初の地下鉄として開通したのは昭和2年(1927)で、世界遺産とは言わない



▲浅草通りの仏具問屋

までも歴史的に価値ある地下鉄路線の一区間ですが、この両駅間にある上野駅寄りの稲荷町駅と浅草寄りにある田原町駅間の地上には、道路の北に面した側に仏壇・仏具店がずらりと並んでいます。こんな街並みもあり見られる風景ではないでしょう。昭和11年(1936)1月に誕生した「東京仏具商組合」は現在「東京宗教用具商業協同組合」となり、その組合員数は51社。このうちの多くが浅草通りに軒を連ねているようです。各店舗の規模が平均して大きいのは扱った商品が大きいからなのでしょう。

浅草界隈の問屋街にもう一つ靴屋さんがあります。浅草・松屋百貨店前から言問橋方向へ橋場通り沿いに靴の問屋が並んでいます。東京靴卸協同組合のホームページでは組合員数74社のうち台東区に本社を構えているのは56社。問屋の店舗ですから華やかな商売をしている風景ではありませんが、一般客向けにバーゲンセールをしている店舗もあり、お買い得品を見つけることができるかもしれません。

台東区には問屋街を形成させるには至らないものの店飾関係、装身具関係、文具関係などの問屋も数多くあります。小売をしている店舗もあり、歩いてみるとなかなか楽しめる街ということがいえるでしょう。

【取材】 文・写真:広報部会・大石憲一
イラスト:同・松原良

第58回「幕末の政治状況と大政委任論の変容」 —井伊直弼の大政委任論を手がかりに— 講師 大庭邦彦さん

◆安政5年(1858)6月、大老井伊直弼はアメリカとの修好通商条約の無勅許調印を断行しました。条約勅許問題は、朝廷と幕府との間に激しい政治対立をもたらしましたが、それは、「鎖国」から「開国」への国是の転換に深くかかわっていたからに他なりません。井伊は、そのような勅許問題の本質を見据えつつ、大政委任論の立場から無勅許調印を正当化したのです。井伊の腹心であった宇津木六之丞が書き遺した『公用方秘録』という史料を手がかりに、大政委任論が幕末政治に与えた政治的意義についてお話しいたします。

○講師略歴：おおにわ・くにひこ

聖徳大学教授。幕末から明治前半期の政治史を中心に研究している。著書に『父より慶喜殿へ—水戸斉昭一橋慶喜宛書簡集—』（集英社）、『徳川慶喜と幕末・明治』（NHK出版）などがある。

- 開催日：9月22日(土) 14:00～15:30
- 申込締切：9月11日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室
- 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】山口千恵子(事業部会)

友の会特別観覧会

「文豪・夏目漱石—そのころとまなざし—」展

◆「漱石文庫」の全容を初めて公開するとともに、豊富な絵画資料や関連資料によって漱石の文学活動と人間的な魅力を紹介する特別展です。橋本由起子学芸員による「見どころ解説」をお願いしてありますので、ご期待ください。

- 開催日：9月27日(木) 17:00～19:00
- 申込締切：9月18日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室/企画展示室
- 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

古文書講座

第2期「入門編」、「初級編」の日程を変更します。

今年度第2期が、「入門編」、「初級編」は日程が変更になっていますのでご注意ください。「中級編」は変更ありません。

- ◆入門編[講師:小松賢司さん(学習院大学大学院史学専攻)]
9/19(水)、10/17(水)、11/14(水)
- ◆初級編[講師:長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)]
9/5(水)、10/3(水)、11/7(水)
- ◆中級編[講師:小宮山敏和さん(徳川林政史研究所)]
9/15(土)、10/20(土)、11/17日(土)

【企画担当責任者】上田太一(事業部会)

第59回「一画家から見た漱石の気になる生き方」 講師 喜多迅鷹さん

◆講師の喜多先生は画家として漱石の足跡をたどり、ロンドン、スコットランドをはじめ、東京、松山、熊本、等々を訪ね歩き、スケッチ紀行「漱石先生と歩く」を著されています。この漱石の生涯をたどるうち、例えば徴兵猶予ぎりぎりでの北海道への移籍、あるいは強度の神経衰弱におちいったロンドン留学、日英同盟への不快感、帰国後の作家活動の中で「大学をやめて新聞屋に」なったこと、かたくなな博士号固辞など、漱石の生き方で気になることがいろいろあったといえます。漱石自身も絵を描くのですが、今回は画家としてよりもむしろ漱石ファンの一読者として、「漱石の気になる生き方」についてお話しいたします。

○講師略歴：きた・としたか

1926年長崎市生まれ。東京大学法学部卒業、以後1971年まで東京都立大学付属高校教諭、東京都立大学講師などを歴任。その後画業に転じ、世界各地を取材・毎年個展を開催。「彩の国を描く会」を創立・主宰。著書は「東京文学スケッチ散歩」「漱石先生と歩く」など多数。

- 開催日：10月2日(火) 14:00～15:30
- 申込締切：9月20日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階学習室1, 2
- 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

第60回「時の鐘と江戸のくらし」 —時刻の取り方・報せ方—

講師 浦井祥子さん

◆江戸では、時の鐘という梵鐘ぼんしょうによって時刻が告げられていました。時代劇でもお馴染みのこのシステムですが、その実態はというと、知られていないことや誤解されていることが数多くあります。どこに設置されていたのか、どのようにつかれていたのか—など、時の鐘の実態を明らかにしていくと、そこには意外な江戸の姿も浮かび上がってきます。江戸の人びとは、どのように時の鐘を聴き、どうやって時刻を取っていたのでしょうか。江戸の時刻と時の鐘のあり方について、お話しいたします。

○講師略歴：うらい さちこ

平成12年、日本女子大学文学研究科史学専攻博士課程修了。文学博士。現在、日本女子大学非常勤講師ほか。著書に『江戸の時刻と時の鐘』(岩田書院)がある。

- 開催日：10月8日(月・祝) 14:00～15:30
- 申込締切：9月27日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室
- 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

見学会

「水戸徳川家見学」(バスツアー)

◆今回は徳川御三家の一つ・水戸家に関連する史跡めぐりを企画しました。特に水戸黄門さまの隠居所である西山荘は水戸から遠く、なかなか訪れる機会が少ない所ですので、西山荘～水戸ドライブイン～水戸偕楽園～常磐神社～水戸弘道館というコースを組みました。

- 開催日：10月13日(土)午前7時30分集合、8時出発
- 集合場所：江戸博北口(東京モダン亭前)
- 申込締切：9月11日(火)必着
- 定員：80名(バス2台) 同伴者2名まで可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)、申込多数の場合は抽選
- 参加費：会員5,500円、同伴者6,000円(いずれも昼食・入館料を含む)。参加費は前納(参加予定者に振込み先と期限を通知します)。

【企画担当責任者】岩松精(事業部会)

「江戸城周辺の探訪—その2」

◆強大な幕府体制がつくりだした近世日本最大の城郭である江戸城。その江戸城内郭(本丸、西の丸、吹上など)を取り巻く内濠は敵の侵入をくいとめる巨大な要塞であり、満々とたたえた水に映る高く築かれた石垣と松の緑との調和された姿は他に比類がない美しい日本の美です。今回はその内濠を一周しながら、周辺に残る遺跡・遺構を探訪し、天下人の居城であった江戸城の壮大さと歴史をしのびます。

- 開催日：10月21日(日)12時45分集合、ただし集まり次第、時間前に順次出発します。
- 集合場所：東京メトロ東西線・半蔵門線、都営地下鉄新宿線「九段下」駅下車 昭和館前
- 申込締切：10月9日(火)必着
- 定員：80名 同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)、申込多数の場合は抽選
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】山本隆(事業部会)

お申込方法

- ◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。「往復はがき」の必要はありません。なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。
- ◆締切：各催事の案内をご覧ください。
- ◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
- ◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 江戸東京博物館友の会事務局

会員優待のお知らせ

●特別展 大鉄道博覧会

～昭和への旅は鉄道に乗って～

残り会期わずか
お見逃しなく!

会期 2007年7月10日(火)～9月9日(日)

休館日：毎週月曜日(7月16日は開館)

会員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円

同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

次回予告

●特別展 文豪・夏目漱石—その心とまなざし—

—東北大学創立100周年・漱石朝日新聞入社100年・江戸東京博物館開館15周年記念—

会期 2007年9月26日(水)～11月18日(日)

休館日：毎週月曜日 ただし10月1日、10月8日は開館、10月9日(火)は休館

会員：一般550円、65歳以上270円、大・専門生440円

同伴者：一般880円、65歳以上440円、大・専門生700円

企画展と特集展のご案内

●企画展 東北大学創立100周年記念展示

東北大学の至宝—資料が語る1世紀—

開催期間 2007年9月1日(土)～10月14日(日)

会場 5階常設展示室内 第2企画展示室

●次回企画展 川上白と江戸千家展

開催期間 2007年10月23日(火)～12月16日(日)

会場 5階常設展示室内 第2企画展示室

●特集展 後藤新平展 生誕150周年記念展

開催期間 2007年7月24日(火)～9月9日(日)

会場 6階常設展示室内 特別展示コーナー

●次回特集展 太田道灌とその時代

開催期間 2007年9月12日(水)～10月21日(日)

会場 6階常設展示室内「江戸城と町割」コーナー

訃報

江戸博顧問(前館長) 小木新造さんが
去る7月12日83歳で逝去されました。
謹んで、ごめい福を
お祈り申し上げます。



*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更のご連絡などはなるべく事務局員出勤の水曜日から金曜日をお願いいたします。

*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報<えど友>第39号

平成19年9月1日発行(隔月奇数月1日発行)

編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：大石憲一(副会長)

編集人：松原良、菅沼和男、岡橋園子、佐藤幸彦、大野晴美、稲垣武志、岡田守弘、岡本静雄、林榮二、深尾恵美子、福島信一

発行：江戸東京博物館友の会

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910